

大塚 われら興れり

——漢文学会報五十号を記念して——

大塚漢文学会委員長 水 沢 利 忠

わが大塚漢文学会のそもそもの起りは、昭和七年、東京文理科大学、漢文科生の第一回卒業（小林信明、内野熊一郎）のときである。なお、漢文学会報の第一号は、翌八年発刊された。それから六十年の歳月が流れ、幾多の変遷を経た。

昭和十七年から二十四年までは、戦時中で、特に昭和二十年には大塚キャンパスも戦災を被り空白が続いた。昭和二十五年復刊はしたが、二十八年に文理大は閉学、会報も十五号からは東京教育大学漢文学会々報と改まった。それもキャンパスの筑波移転により昭和五十四年を以て終息。学燈ここに絶えんかと思われたが、昭和五十五年、「大塚漢文学会」として再発足した。その衝に当って最も苦慮された加賀栄治委員長の巻頭言（会報三十八号）「新たなるいでたちにあたりて」に、その間の経緯が記されている。誌名も「中国文化——研究と教育——」と、よそおいを新

たにして年々内容も充実して号を重ね、今年で五十号を数えるに至った。

井戸の水を飲むときには、井戸を掘った人の苦心を思えという。往時の記録により、第一回の漢文学会のもようを顧みたい。

昭和七年二月二十日、午後一時より本館第二会議室において、漢文学会発会式が行なわれた。職員、先輩、学生、参加者は百余名、式は盛況裡に、且つ厳粛に進められた。一、発会式。開会の辞 田波又男、経過報告 藤川熊一郎、島田鈞一會長挨拶、大瀬甚太郎学長祝辞、顧問祝辞 服部宇之吉博士、評議員祝辞 内野台嶺助教
二、記念講演。「行不由徑」諸橋轍次教授、「竹書紀年につきて」原富男先生、「道を論じて孫中山に及ぶ」小柳司氣太博士、閉会の辞 小林信明。
暮色せまる玄関前で記念撮影。

三、懇親会。席を神田維新号に設け、午後六時開会、会する者三十余名。先ず諸橋轍次先生挨拶。松井簡治博士、塩谷温博士、田口福司郎・佐藤正範・浜野の諸先輩、交々立って漢学の大使命を高調されて、若き学徒を激励宴まさに酣となるや、塩谷博士は得意の日本外史、桜井駅の全章を朗吟、満座三歎。次いで原先生の中国民謡、小林信明の詩吟等、尽きざる興を添え、春末だ至らざるに春氣座に満ち、我が学会の前途、洋々たるものあり。かくして九時散会す、と。

当時、学生の数は寥々たるものであったが、その意気と活躍は、研究に教育に偉大な実績を示した。詩人北原白秋は、奇しくも校歌にうたい上げた。

青雲の空に高く 桐の葉と照り明るもの 故あり大塚
我ら興れり

第五十号の公刊にあたり、わが大塚漢文学会の、ますますの発展を祈ってやまない。